

A.S. プーシキン 生誕225周年 記念映画祭

プーシキンの魅力を再確認 ファンタジーを堪能しよう!

『サルタン王
物語』

『ルスランと
リュドミラ』



2024年

6月13日(木) 13:00～『サルタン王物語』 (1966年/86分)

14:50～『ルスランとリュドミラ』 (1972年/140分)

浜離宮朝日ホール小ホール 中央区築地5-3-2 朝日新聞東京本社・新館2F (都営大江戸線「築地市場駅」(A2出口) すぐ)

入場料: 1,000円 (一日券) 全席自由席

お問い合わせ: 株式会社ロシアン・アーツ ☎03-5919-1051 (平日11:00-17:00)

主催/ロシア文化フェスティバル日本組織委員会

後援/ロシア連邦文化省、駐日ロシア連邦大使館、ロシア連邦文化協力庁、日協、INARTEX、ロシアン・アーツ
協力/モスフィルム

A・S・ プーシキン 生誕225周年 記念映画祭

上映作品



『サルタン王物語』

監督:アレクサンドル・ストゥシコ

(1966年/86分)

民話をもとに、プーシキンが1831年に韻文で書いたおとぎ話。1832年刊行の、最初の詩集に収められた。

<あらすじ>

サルタン王が戦争に出陣している間に王妃はグビドンを生んだ。ところが王妃と王子は反逆者のため、樽に詰められ、海に捨てられ、ある島についた。そこで王子は白鳥を救った。そのお陰で二人は魔法の町を治めることになった。そんなある日、町にサルタン王国の商人が来た。父の国のことをきいたグビドンは故郷を思った。白鳥(=王子)はその王子の悲しみを察し、彼を蜂にかえてサルタン王国へ行けるようにしてやった。一方、サルタン王は、商人たちからグビドンの国の不思議なことを聞き、グビドンの国に向けて出発することにした。それが我が子の国とは知らずに…。



A・S・プーシキン (1799-1837)

詩人。母方の曾祖父、ガンニバル将軍はエチオピア出身でビョートル1世の寵愛を受けた。このアフリカの血はプーシキンの気質や相貌に現われていると言われている。農奴制などを批判し、すぐれた政治詩を書いたが、そのため南ロシアに送られ、1824年には要注意人物としてプスコフ県ミハイロフスコエ村の領地で謹慎を命じられた。そこでの生活、乳母の語ってくれるロシア・フォークロアの世界との触れ合いが、プーシキンをロシアの国民詩人へと成熟させた。1837年に決闘で致命傷を負い、37歳の生涯を閉じた。プーシキンの主要な功績は、近代文章語の確立と新しい国民文学の創造の2点である。(参考:『ロシアを知る事典』『プーシキン』川端香男里)



『ルスランとリュドミラ』

監督:アレクサンドル・ストゥシコ

(1972年/140分)

1820年、プーシキンが弱冠21歳で発表した物語詩。これにより、プーシキンは若い世代の熱狂的な支持を得た。

<あらすじ>

古代キエフ公国の全盛時代。ルスランは、異民族の襲撃より当時の首都キエフを守った。この民族的英雄のルスランは、その勲功を大公より称えられ、王位継承者に選ばれ、そして娘リュドミラの婿となった。ところが婚礼の夜、リュドミラは魔法使いチェルノモールにさらわれる。大公は悲嘆にくれ、ルスランらに娘を捜すように命じた。だが彼らの行く手をふさぐ障害の数々。やがてルスランは敵を知り、リュドミラと再会する。そして、折しもキエフを包囲していた異民族と戦っていた軍隊も、ルスランの帰還で俄かに活気づき、敵を打ち破り再び平和が訪れるのであった。

